

トラフグのブランド化とその努力

鷹島阿翁漁業協同組合 青壮年部

山崎 正次

1. 地域の概況

鷹島町は長崎県北部の伊万里湾湾口に位置し、西には平戸、東には佐賀県の虹の松原を望み、歴史的に有名な元寇の島として名が知られている。島内にはモンゴル村という観光施設も整えられている。島は美しいリアス式で入江に富み、養殖に適した場所が多くある地区である。

2. 漁業の概況

鷹島阿翁漁業協同組合は正組合員250名、准組合員320名で構成され、魚類養殖を中心に、吾智網、小型底曳網、定置網、延縄、たこつぼなどが営まれている。平成12年の漁業生産量は2千233トン、水揚金額は40億1千万円であり、そのうち魚類養殖業が組合全体水揚金額の約87%となる34億8千万円を占めている。

3. 研究グループの組織及び運営

鷹島阿翁漁協青壮年部は45歳以下の部員95名で構成されている。以前は鷹島漁協青壮年部と阿翁浦漁協青壮年部の2つの青壮年部で活動していたが、平成10年に両漁協が合併したのを期に青壮年部も合併することとなった。合併から2年、ようやく青年部としての地盤も固まりつつある状態である。

4. 実践活動課題選定の動機

鷹島ではもともとハマチ養殖が主であったが、価格の暴落などからタイからヒラメ、最後にトラフグへと魚種を転換してきた。

鷹島の漁場はトラフグを育てる環境に適しており、養殖はうまくいくと考えていた。しかし、トラフグ養殖を始めてみると、噛み合いや今まで見たことがない病気が発生して死にやすいことに驚き、トラフグ養殖の将来に強い不安を感じ、これまでにない養殖方法を考える必要に迫られていた。

そこで、30代までの若い経営者で養殖青年部を作り、トラフグの養殖技術や販売方法等について漁協も交えながら意見交換を行い、トラフグ養殖を成功させるための様々な取り組みを開始した。

5. 実践活動状況及び効果

私たちは市場で信用を受け、安定的に高値で取り引きされるトラフグのブランド化を目指した。

手始めに安定的な供給を目指し、漁協が出荷先を手配することを条件に、養殖トラフグ全てを漁協経由で出荷することにした。しかし、この取り組みは「質の悪いトラフグの影響で価格が下がる」との思いを抱く人のために困難を極めた。私たちは漁協とともに品質規格統一に関する様々な問題を一つ一つクリアしながら、安定的に漁協経由で出荷できる体制を作り上げていった。

(1) トラフグの姿形を良くする

まず、最初に求められたのが姿形、特に尾鰭を残したトラフグを作ることであった。

トラフグは鋭い歯で網を破り、噛み合いを行った。そこで私たちは熊本県天草へ赴きフグの歯切りについて研究し、青年部員を中心に試行錯誤を繰り返しながら取り組んだ。このことによって噛み合いによる尾鰭欠損も少なくなり、トラフグ本来の姿を保てるようになった。また、空腹による噛み合いを防ぐため、歯切りを行うまでは日が昇る前から餌を与え、満腹感を保つようにした。さらに、トラフグへのストレス軽減のために筏1台当たりの放養密度を、養殖開始当初の密度より5割前後減らした。

(2) 身の質をよくする

次の問題は身の色であった。天然トラフグとの価格差は、当初漁協の販売努力不足に起因するものと言う人が青年部員内には多かった。しかし、漁協や市場関係者と話しを続けていくうちに、私たちのトラフグが天然ものと比較にならないほど身の色が悪いことを知り、ハマチやタイ以上に身の色に気を使う必要があること実感した。

トラフグ養殖を始めた頃は、サバ、イワシ等を与えていたため身が黒くなっていた。そこでサバ、イワシを止めてアミとアジ中心の餌に変え、投餌方法もトラフグの発育段階に合わせて変えた。稚魚を入れて歯切りまでの3週間前後は、共食いや噛み合い防止のため、アミを溶かしたものを早朝から手作業で食べさせた。その後イカナゴとアミのミンチに栄養剤を混ぜて食べさせ、8月頃から餌にアジを少しずつ混ぜながら一方でイカナゴを徐々に減らして、最終的にアジとアミだけの餌にした。出荷時期になると大ナゴ等を混ぜた。このように白身の魚を与えてむき身の色を向上させ、大ナゴの油を餌に加えて大きなトラフグにすることを狙った。

さらに餌の質にも気を配った。トラフグは少しずつ摂餌するため、満腹状態になるまでに長時間を要する魚である。一方、餌は長時間の投餌中に劣化し、特に夏場は直射日光や気温によって劣化のスピードが早くなった。私たちはクーラーボックスに餌を入れて投餌し、さらに、日が昇る前から餌を準備して気温が上がる前までに投餌するなど質の良い餌を与えることに心がけた。

(3) 極力病気を発生さないようにする

魚病は食品としての安全性だけでなく、魚病によるへい死魚数の増加は経営にも影響を与える重大な問題であった。

トラフグの病気は、口の回りが白くただれるような症状見せる口白症、肝臓の色が変わる肝臓障害、トラフグに寄生する寄生虫名に由来するヘテロボツリウム症や白点病など、これまで扱ったことのない病気ばかりだった。

まず、口白症は病気の蔓延防止が重要なので病魚の毎日の取り除きを推進し、さらに、病気蔓延の要因である噛み合いを防ぐため、歯切りや薄飼を徹底していった。

肝臓障害は投餌記録の洗い直しにより食わせ過ぎの時に起こりやすいこと突き止め、餌止めを実行したところ病気の発症が減った。

ヘテロボツリウム症や白点病は、薬が入った海水内で泳がせる薬浴が有効な対策であった。しかし、ホルマリンに対する消費者の拒絶反応を見て食品生産者としての責任を痛感し、薬を使わないための予防法について話し合った。私たちは寄生虫の寄生を防ぐために、寄生虫の活動が活発な春と秋に地域ごとの養殖場での一斉網替や底質改良剤の一斉散布等に取り組んだ。また、薬浴も安全性が確認されている薬の使用を徹底した。

このような努力により大量死はなくなりつつあり、歩留まり50%以下ということはほとんどなくなってきた。

(4) 出荷方法の確立

出荷時の課題は漁協から市場や消費者に届く間に重量が落ちない、すなわち値切れしないトラフグを出荷することであった。養殖青年部と漁協は、出荷前の餌止めと、筏内にいる全てのトラフグを計量する取り組みを始めた。

取り組み開始当初は、餌止めによって魚の重量が落ち、予想価格より取引価格が落ちることも多々あり、不満の声も多く聞かれた。しかし、漁協でまとめて出荷する以上、一人でも値切れするトラフグを出すと全体の信用も得られないとの意識を養殖業者が持つようになり、身の詰まった魚を作ること力を入れるようになった。その結果、流通業者間での鷹島トラフグの信用は高まり、値段も安定してきた。

6. 波及効果

このような努力をして育てたトラフグは、下関市場でもっとも天然に近い養殖フグとして太鼓判を押してもらいほど姿形や身質がよくなり、私たちのトラフグに自信をもてるようになった。また、テレビ番組でも日本一のトラフグとして紹介され、鷹島のトラフグがブランドとして広く定着するようになった。

トラフグの価格は、養殖開始当初2700円/kgであったものが、ブランド化された時には4000円/kgまでに跳ね上がり、他地区より高値で安定した価格を保つことができるようになった。

これによって、鷹島のトラフグ生産量、生産額ともに年々増加の一途をたどり、平成5年から12年までに生産量は159トンから956トン、生産額は6億54百万円から32億5百万円となった。実に生産量は約6倍、生産額は約5倍の増加となった。

また、養殖業の発展と所得の向上は、働き口の提供とともに後継者の増加につながり、私たちの青壮年部は毎年新しい部員を迎えている。

7. 今後の課題

今のトラフグを取り巻く状況は、安い中国産トラフグの輸入量や日本国内のトラフグ養殖量の増加により年々厳しくなり、今の状況に安穩としておるとすぐに足下をさらわれ兼ねない状況にある。

漁協では2年前から管内養殖業者全員のトラフグを一同に介し、品評会を行っているが、結果を見ると同じ養殖場で同じ種苗や飼料を用い、同じように養殖しても品質に差が出てきていることがわかる。私たちは鷹島ブランドを維持していくために、個人差を縮めるための情報の共有化を図って行く必要があると考えている。

さらに現在、漁協や大学、流通関係者と協力しながら他地区にないトラフグの良さや利用方法を模索しており、その一つの方法として、今年から漁協とタイアップして身欠き加工を始め、さらなる消費者獲得に乗り出した。また、確固たるブランド名確立のために「鷹ふぐ」の商標登録も始めた。

今後も他地区の一步前を進むための努力を組合はじめ、青壮年部、養殖業者一丸となって努力し、消費者が安全に食べられるトラフグを育てていくつもりである。

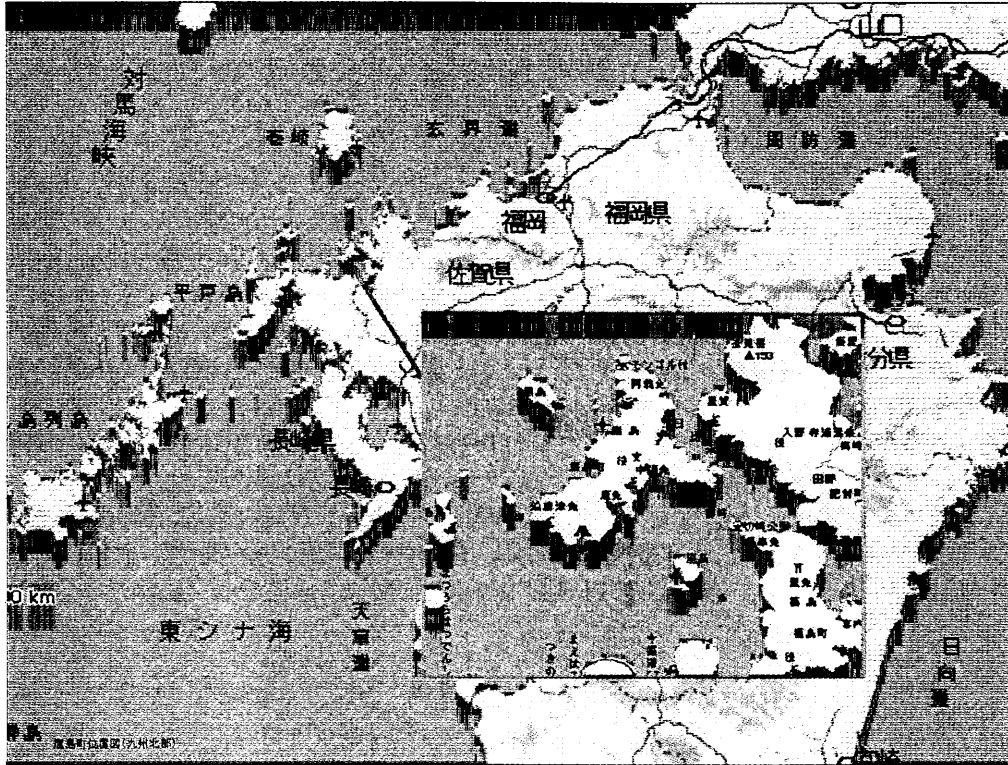


図1 鷹島町位置

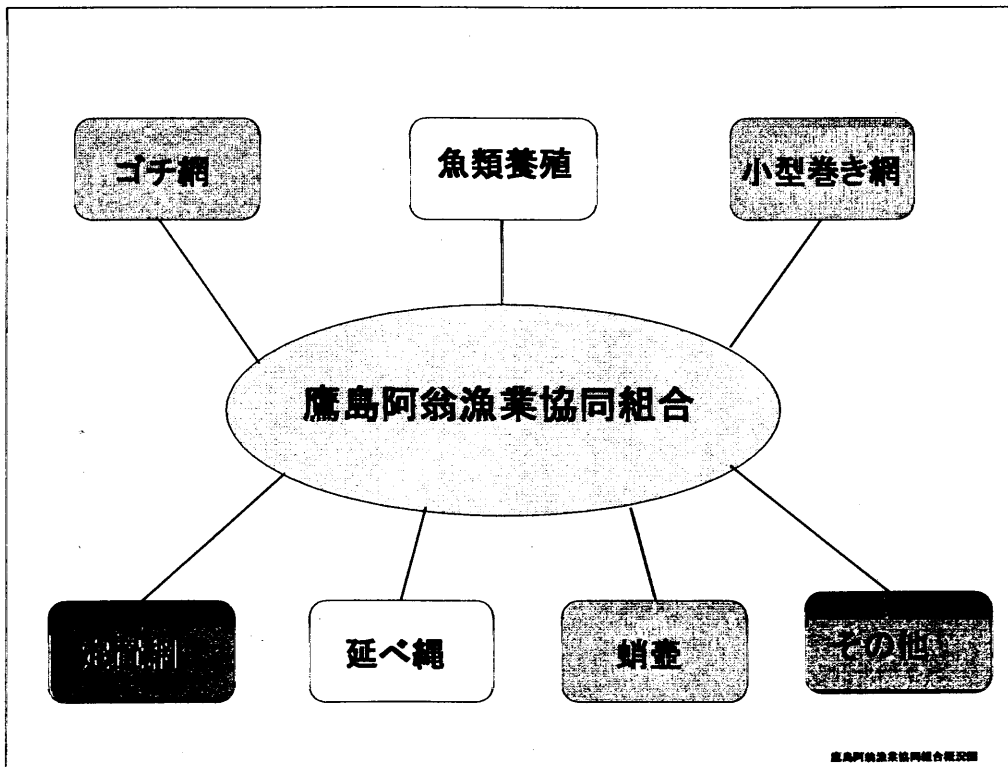


図2 鷹島漁協漁業概況図

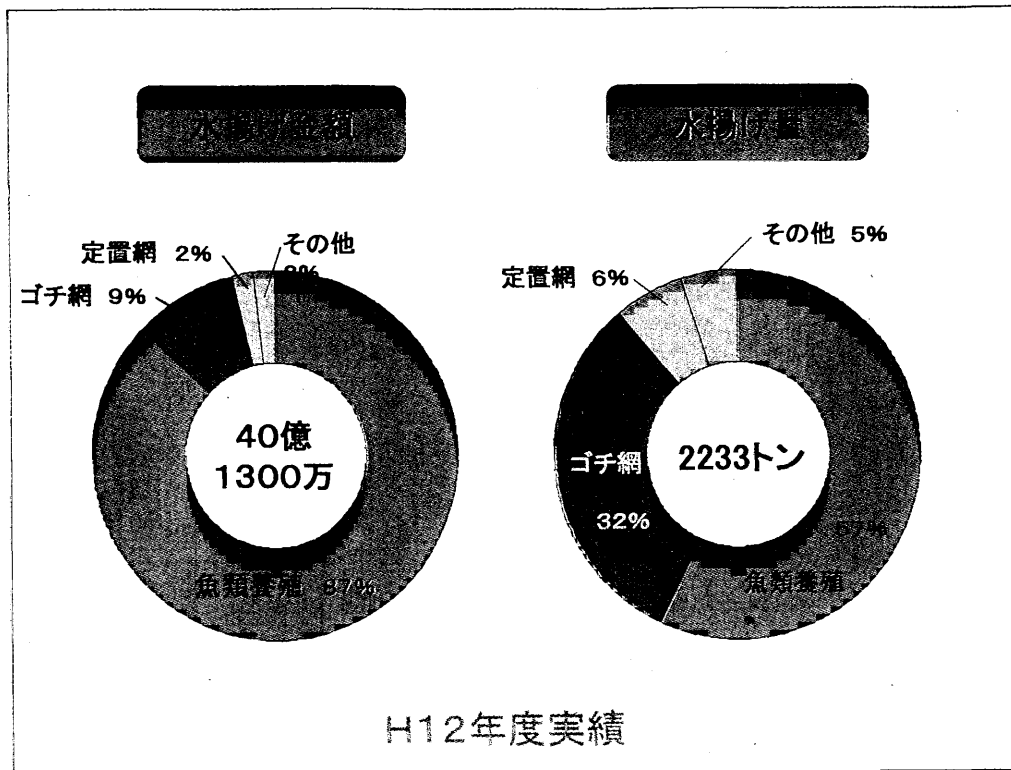


図3 漁業種類ごとの水揚げ金額と水揚げ量

鷹島トラフグのブランド化に向けて

- 安定供給を目指して
- 全トラフグを漁協共販出荷の徹底
- 品質規格の統一化を目指して
 - 1、姿形を良くする
 - 2、身の質を良くする
 - 3、極力病気を出さないようにする
 - 4、出荷方法の確立

図4 鷹島トラフグのブランド化に向けて

トラフグ平均単価の推移

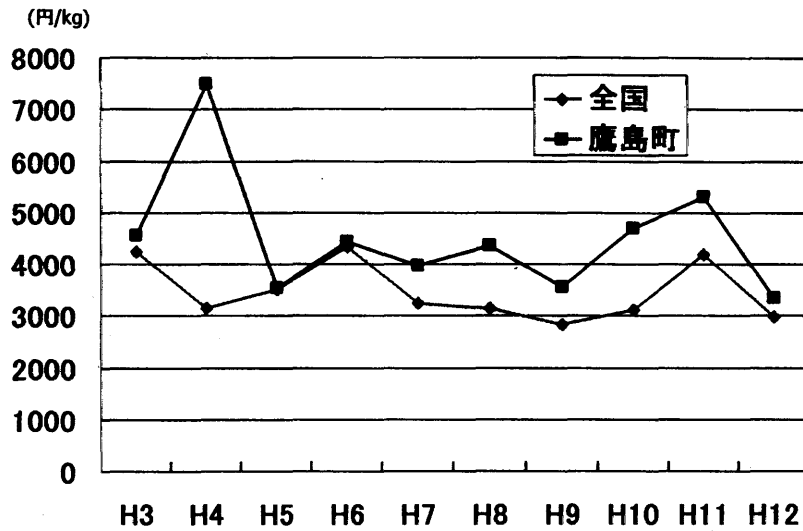


図5 トラフグ平均単価の比較

トラフグ生産量・生産額の推移

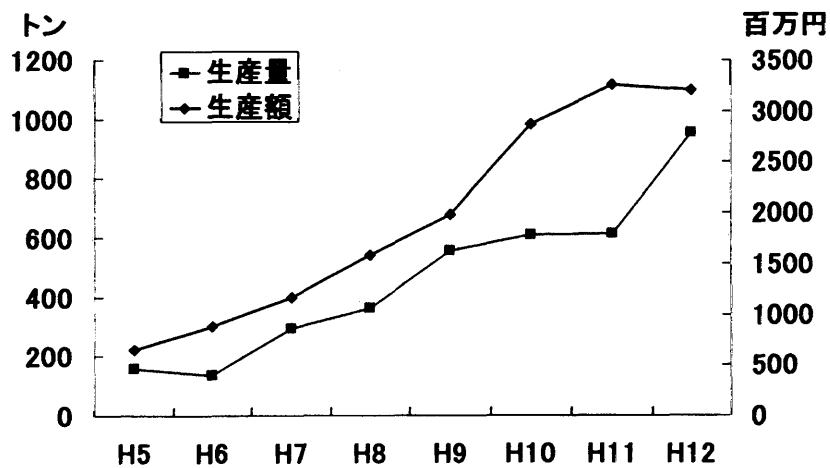
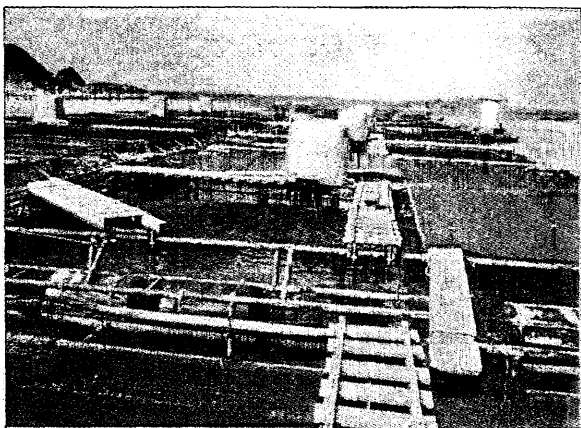
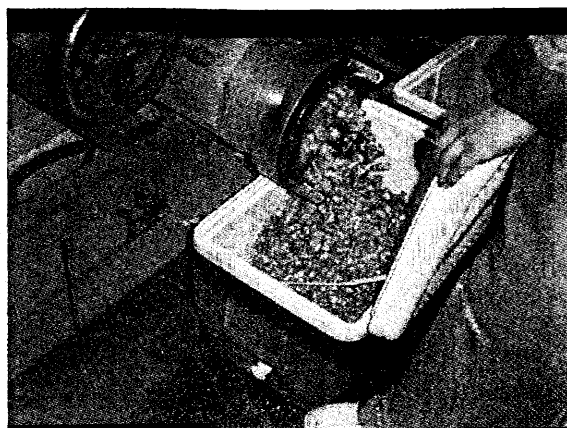


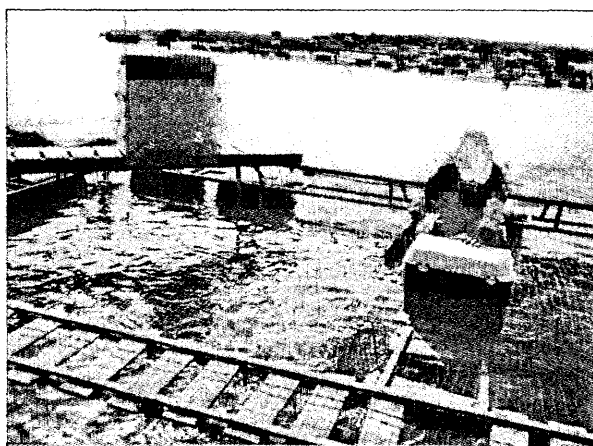
図6 トラフグ生産量・生産額の推移



トラフグ養殖筏



クーラーボックス内の餌



投餌風景



検量風景



ブランドシール